

仲間づくり・まちづくり～児童館にできること

幾島博子

NPO法人ふれあいの家—おばちゃんち代表理事

1978年から34年間自治体職員として児童館等で働き、退職前の5年間はNPOと二足の草鞋を履き、現在はNPOの代表理事と、児童館の延長線上にあるいくつかの市民活動に携わっています。

年々ごく身近でも児童虐待やそれに近い状況にある、また予備軍と感じる子どもや保護者に出会うようになり、いかに児童虐待を予防するか、「子ども・子育てにやさしいまちづくり」＝「児童虐待のないまちづくり」を担うNPOの役割の大きさを感じる日々です。

さて、今や子育ての様々な場面は切り取って外注でき、消費活動として子どもに「よい」環境を用意してあげることが可能になりました。親は仕事や生活に追われ、ともすれば「いかに効率よく切り売りできるか？」と発想し、子どもの育つ環境としてはそれが「よりよい」のだと煽り惑わす情報が追い打ちをかけています。しかし、どんなにお金をかけて「よい」環境を用意しても、親としての外からの評価に身構え、追い立てられ、喜びと辛さを分かち合う心許せる仲間との関係が希薄であれば、子育ては喜びよりしんどさの方が上回ってしまいます。そして子どもはその子らしくよりも大人の望む姿を強いられ、結果、自尊心の低い子どもたちがあらゆる層で多くなってきているのでしょうか。

このような状況の中で、児童館は無料や安価で誰にでも利用しやすい行政サービスとして、どの地域にも欠かせない施設です。そして消費文化の中での単なる「安価なサービス提供」だけになることなく、仲間づくりの場としての役割が大きいのではないのでしょうか。児童館の役割は、支援が必要な親子は温かく丁寧に見守り、専門機関と連携し必要な支援につなぎつつ、児童館ではホッとしてくつろいでもらえるようにすることです。だ

からと言って全ての親子を「お客様（サービスの享受者）」にはいけないと思います。まちで暮らす人同士、児童館に来訪する人同士、お互い様で迷惑かけ合い、助け合って、喜びも辛さも共感し合いエンパワーされる。できる人は自分の得意なことを活かして何か活動を始めることもでき、子どもだけでなく大人も育っていく場でなければならぬと思います。その主役は市民であり、児童館職員は黒子なのだと思うのです。

これはNPOも同様で、個別的な支援と同時に親同士が支え合うピアサポートの関係づくりを進めていくことを大事にしてきました。またNPO活動を担う私は暮らすまちの一市民なので、我が子の母、孫のパパ、そしてまちの「おばちゃん」として、乗物や店の中で、微笑ましい親子やちょっと困っている親子の姿が思わず気になり、まなざしを向けたり声をかけたりします。誰もが子ども・子育てを見守れるまちであること、それが何よりの児童虐待防止なのだと思います。

児童館をはじめとする行政の子育て支援事業とNPOや市民活動がそれぞれの持ち味を活かして両輪となり、連携、協働していくことで、虐待のないまちづくりが進んでいくのだと思います。子育ては思い通りにいかずイライラするのも当たり前／困ったときはちょっと肩をしておろしてみよう／おろした荷は誰かに持ってもらえばいい／そんな親子を見かけたら「がんばってるね」「だいじょうぶ？」と声をかけてみて！／ほんのちょっとのおせっかい／あなたにできる子育て応援／虐待のないまちを願って

(2018年11月 児童虐待防止推進月間特別講演会～広げよう つながろう！子育てのわ！～あなたにできる子育て応援 講師：鈴木秀洋氏 呼びかけ文から)